

皆さんこんにちは。

今年の梅雨入りは例年に比べ早かったようですが(沖縄ではすでに梅雨明けが宣言されたとのこと!)、こんな季節のお出かけにこそ美術館がおすすめです。

快適な展示室でゆっくりと作品をお楽しみいただければ、鬱陶しいお天気も一時忘れて過ごすことができるのではないのでしょうか。

ただいま開催中の「麻生三郎」展は今週日曜日までとなります。広々とした展示室で、作風の変遷をじっくりと味わうことができるとご好評いただいている麻生展。ぜひお見逃しのないように。

さて、去る3月11日、東日本では、私たちの多くが経験したことのない大震災にみまわれました。

東北を中心とする地域の人々は家族や家を失い、一瞬にして平穏な生活を奪われ、その被害の甚大さは日本だけでなく世界中の人々に大きな衝撃を与えました。

これらの地域の人々が受けた物質的・精神的な被害は、まさに想像を絶するといきようがありませんが、同時にこの地域で守られてきた数々の文化財も、大変大きな被害を被りました。

そこで、このたび文化庁により「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業」(通称文化財レスキュー事業)が組織され、震災の被害にあった文化財を救出する作業が始まりました。

さてこの文化財レスキューには、第1陣、第2陣とつづけて、当館からも2名の学芸員が派遣されました。

(2011年6月9日現在)

そこで、第1陣に参加した大島学芸員のルポ(中日新聞に掲載)をここにご紹介します。

動き出した文化財レスキュー

3月11日の東日本大震災以来、私はどこか後ろめたい気持ちにつきまとわれていた。被災した人々のことを案ずれば当然胸が痛むが、しかし、だからといって自分に何ができようか。そう思うと、ますます心苦しくなった。

そんな中、文化庁の要請のもと組織された「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業(文化財レスキュー事業)」の委員会に全国美術館会議(全美)が加わることになり、被災美術品に対するレスキュー隊を全美が組織することになった。これは美術館人としてぜひ参加したいと思い、すぐに志願した。

全美文化財レスキュー隊第1陣には、国立西洋美術館、静岡県立美術館、愛知県美術館、和歌山県立近代美術館、兵庫県立美術館の5館から計6人の学芸員が集まった。派遣先は、宮城県石巻市の石巻文化センター。任務は、被災後、手を付けられないままとなっている同センターの収蔵庫内の美術品約200点を、現場で1点1点写真記録後、応急処置を施して梱包し、宮城県美術館に移送保管するというものだった。

石巻市は町自体が津波の大きな被害を受けたため、センターのスタッフは市職員として市民のケアに当たっており、自分たちでそれら被災美術品の対応をすることはほとんど不可能な状態であった。かくして、私たち全美のレスキュー隊の出番となったわけである。

石巻文化センターの美術品収蔵庫は津波で扉が一部破壊され、一度天井まで水につかっていた。4月27日の朝に私たちが現場に到着した時には、水は引いていたものの、高湿度の中、カビによる被害が広がり始めていた。また、追い討ちを掛けたのが、付近の製紙工場から収蔵庫内に流れ込んだ大量のパルプである。それが作品のあちこちに付着して、まだぬれているものは腐りだし、あるいは、乾き始めたものは作品に固くこびり付きだしていた。

損傷の種類は他にもいくつかあるが、とにかくそれらの被災美術品は、そのまま放置し続ければ、修復不可能なところまで状態が悪化してしまう危険性もあった。かくして、それらが専門の修復家による本格的な修復を受ける時が来るまで、損傷の進行をできるだけ抑える必要があった。それで私たちは、物資の面でも時間的にも限られた条件下で、適切と判断される程度、付着物の除去や絵の具層の剥落防止などの応急処置を現場でひとまず行った。



▲駐車場に彫刻類を運び出し、応急処置をするレスキュー隊＝宮城県石巻市の石巻文化センターで(筆者撮影)



▲収蔵庫前で保護のため絵画を梱包するレスキュー隊＝宮城県石巻市の石巻文化センターで(筆者撮影)

そして全美レスキュー隊第1陣は、29日までに石巻文化センターから美術品約200点(および、書簡などの資料数百点)を救出し、宮城県美術館に移送保管した。それらは現在、同館で全美レスキュー隊第2陣によって、

入念な追加の応急処置を施されている最中である。貴重な文化財を守り、後代にきちんと残し伝えるため、今後も石巻文化センターの被災美術品に対する全美のレスキュー事業には、継続的に人材が送り込まれる予定と聞いている。

他の深刻な被災地同様、石巻では今はまだ生活に直接かかわる問題が最優先であると思われるが、石巻文化センターの文化財は、あの地域が本格的に復興しようとする際、市民の大きな精神的よりどころとなるはずである。遠からず来るその時のために、美術館の世界に生きる私たちは芸術というものの持つ力を信じて、レスキュー事業に取り組んでいる。

あれらの美術品や資料が本格的な修復を経て、晴れて再び石巻文化センターで展示されることになったら、その祝福すべき光景を自分の目で見ると、もう一度石巻を訪ねようと思っている。その日が一日も早く来ることを切に願っている。

(愛知県美術館 学芸員 大島徹也)

【中日新聞 5月20日(金)夕刊より転載。(当ブログ転載にあたって写真を1点[上]追加しました。)]

文化財といった、人々の生命に直結しないものへの被害に思いをめぐらすことは、震災直後にはなかなか困難なことかもしれません。しかし、ある地域の文化的な財産は、その地域の人々のアイデンティティとも直結しているはずですし、大島学芸員の言うように、そのような地域の宝物が復興の過程で重要な役割を果たすはずだと私も思います。まずは国の財産として保護すべきという考え方もありますが、人々が故郷での生活を取り戻していくことと決して無縁ではない事業だと言えるのではないのでしょうか。今後文化財レスキューの事業が続いていくとすれば、愛知県美術館としてさまざまな形でこの事業に協力していきたいと考えています。

なお、当館では現在、文化財レスキュー事業を支援するため、義援金箱を設置しております。

皆さまのご協力をお願い申し上げます。

(S.N.)